

鄧永成教授を偲んで ——友情と協働の 25 年——

東アジアオルタナティブ地理学地域会議 (EARCAG) 国際運営委員会 (森 正人 訳)

東アジアオルタナティブ地理学地域会議 (EARCAG) の国際運営委員会が、わたしたちの親愛なる友人であり同僚である鄧永成教授が2024年1月26日にこの世を去ったことを報告するのは、とても悲しいことである。約25年もの間、ウィンシンの知的洞察と運営努力で成長と拡大を遂げてきたEARCAGで、彼は重要な役割を果たしてきた。わたしたちはウィンシンのご遺族に心からの哀悼の意を表したい。

香港を拠点とし、ウィンシンは批判地理学者であり、都市研究者であり、その研究は都市研究者の主流派に、とくに中国本土と香港における都市の発展の社会一歴史的過程とパターンについて問いを投げかけ、そのために新たな存在論、認識論、方法論、とりわけ「通変」の知識に裏打ちされた空間論的方法論と空間物語のアプローチを定式化することに照準を定めたのだった。

ウィンシンの EARCAG への貢献

1999年、ウィンシンは大韓民国で行われ「大きな成功」「これまで参加したなかで最高の[会議の]一つ」と彼が言うEARCAG発足式に参加した。発足式の終わりに、次回は香港で行われることが決定

し、そのときから彼は積極的な運営委員であり続けた。2001年には香港バプティスト大学での第2回 EARCAGの体制を率い、その大学で彼は2018年に地理学の正教授を退職するまで教鞭をとり続けた。彼は水岡不二雄氏とこの会議のいくつかの発表を選び *East Asia: A Critical Geography Perspective* を刊行した。2016、ウィンシンは香港での再度の第8回 EARCAGを開催すべく、当地の組織委員会の長を務めた。

長きにわたり、ウィンシンは大韓民国、香港、日本、台湾、マレーシアでのEARCAGで開催された10回の会議すべてに参加した。ウィンシンは、たとえば「Post-gentrification」(第10回、台北、2022)、「Social Justice and the City in East Asia」(第7回、大阪・東北、2014)、「The Urban Research Plaza Special Session on Alternative Urban Redevelopment」(第6回、セランゴール、2012)、「Urban Redevelopment in East Asia」(第5回、ソウル、2008)というように、テーマを限定したセッションを組織したり、座長をつとめたりした。これらの会議で、合計15もの発表を行い、中国本土や香港における相異なる地理的問題に光を当て、理論的突破を試みた。彼はさらに、カナダと台湾で二度のEARCAG Geopolitical Economies (EARCAG-GPE) ワークショップに出席し、二度発表している。

以下はウィンシンの発表一覧である。

表1 EARCAG における鄧永成教授の発表一覧

2022 第10回EARCAG 台北	Towards a Land Situated Spatial Story as Informed by the Tongbian Philosophy (Solly Benjaminとの共著)
2018 第9回EARCAG 大邱	Gentrification is Dead: 'Nano'-isation in Hong Kong (Maurice Yipとの共著)
2017 第3回 GPEワークショップ 台北	The Umbrella Movement in Hong Kong: A Spatial Story Approach
2016 第8回EARCAG 香港	'Hegemony' of Property, Social and Political Struggles and Spatial Justice in Hong Kong: The Cases of Court Injunction in Admiralty during the Umbrella Movement and in Land Grabbing in Ma Shi Po, New Territories (Yiu-Ming Toとの共著)
2015 第2回 GPEワークショップ バンクーバー	Occupying Movements in Hong Kong: A Spatial Story Approach

2014 第7回EARCAG 大阪・東北	High-density Development in Hong Kong and its Spatiality of (In)justice (Joanna Wai-Ying Lee and Alan Smartとの共著)
2012 第6回EARCAG セランゴール	Where is Spatial Justice in Urban (Re)development of Hong Kong – with Special Reference to the Sham Shui Po District?
2008 第5回EARCAG ソウル	Public Engagement as a Tool of Hegemony: The Case of Designing New Central Harbour Front in Hong Kong (Joanna Wai-Ying Lee, Mee-Kam Ng, Darwin Leungとの共著)
2006 第4回EARCAG 台北	Space, Power and Street Sleepers in Hong Kong (Ka-Hei Chanとの共著)
	Working Class Geographies and Urban Redevelopment in an Industrial Township in Hong Kong (Kit-Ping (Tammy) Wong, Ka-Hei Chan, Kim-Ching Chanとの共著)
	‘The Freedom of Shopping’ – The Commodification of Public Street in Hong Kong (Pui-Yee Manとの共著)
	Examine the New Rationality of Governmentality of the H.K. Government to Discipline Pig Farmers by Using the Yuen Long District as a Case Study (Kin-Wing Chanとの共著)
2003 第3回EARCAG 大阪・東京	Global Restructuring, Urban Redevelopment and Population Displacement in Tsuen Wan, Hong Kong
	Housing Movements for the Poor in Hong Kong: Fighting for the Public Rent Review
2001 第2回EARCAG 香港	Illegal Construction in Shenzhen: The Extension of Urban Governmentality over Time and Space
	Development of Tsuen Wan New Town in Hong Kong: Power, Rationality and Space (Kit-Ping (Tammy) Wongとの共著)
1999 第1回EARCAG 慶州・大邱	Governmentality, Time-space Colonisation and China’s Socialist Geography

これらの会議やワークショップでの討論や議論に加えて、ウィンシンは2023年にEARCAGオープンコース・イニシアチヴやオンライン講座 *The Production of Space: A Critical Geography Perspective on China* の配信に参画するなど、EARCAGコミュニティの成長のために進んで革新的な第一歩を踏んだ。

ウィンシンとの継続的な友情

多くの同僚や友人がEARCAG をととしてウィンシンと何年もの間、出会ってきた。CHOI Byung-doo、MIZUOKA Fujio、MIZUUCHI Toshio、HSU Jinn-Yuh、PARK Bae-Gyoonの5人のシニアメンバーによる回想は、本号に別に掲載する。ここでは、以下の国際運営委員(メンバーリスト参照)がウィンシンとの友好と大切な時間を回想する。

国際運営委員会メンバーリスト

- CHOI Byung-doo (Daegu University)
- CHU Ling-I (National Changhua University of Education)
- GLASSMAN Jim (University of British Columbia)
- HSU Jinn-yuh (National Taiwan University)
- HSU Szu-Yun (McMaster University)

- IP Iam-Chong (National Yang Ming Chiao Tung University)
- KORNATOWSKI Geerhardt (Kyushu University)
- MIZUOKA Fujio (Hitotsubashi University)
- MIZUUCHI Toshio (Osaka Metropolitan University)
- MORI Masato (Mie University)
- PARK Bae-gyoon (Seoul National University)
- SHIN HaeRan (Seoul National University)
- SHIN Hyun Bang (London School of Economics and Political Science)
- SONN Jung Won (University College London)
- † TANG Wing-Shing (Hong Kong Baptist University)
- WONG Kit Ping (Tammy) (Osaka Metropolitan University)
- YIP Maurice (University of Lausanne)

CHU Ling-I:

わたしは研究を始めたのがとても遅く、中年になってからでした。ウィンシンはわたしを知的に刺激しただけでなく、わたしが道に迷ったときタイムリーに導いてくれました。わたしは、疑問や不確かさから解放し、何ができるかに焦点を当てるように導いてくれる彼の暖かい励ましに本当に感謝しています。

2023年のEARCAGのオープンコースの準備のとき、わたしはウィンシンとより緊密に関係を持つ幸運な機会に恵まれました。彼は“*The Production of Space: A Critical Geography Perspective on China.*”のテーマで4つのオンライン講義を行いました。わた

しはアンリ・ルフェーブルが空間の生産を論じるときに三つの側面（三つの弁証法）をなぜ用いなければならないのかという、浅はかな質問をしたことを覚えています。彼は中国思想の「陰陽」や「通変」の概念を使って、非常に洞察力のある解釈を示しました。当時、このことはわたしにとって衝撃的で、西洋理論を解釈するのに中国の諸概念を使うと彼が主張するのに理解することが難しかったのです。彼の四つの厳密で堅実な講義をとおして、わたしは次第に、彼の知的な企みが、西洋／中国の理論を対立させることで無理やり融合させることでもないことを理解しました。重要なのは、歴史的・地理的諸関係と翻訳の絡み合った過程をとおして空間の生産を理解することにあるのだと、彼は信じていました。言い換えれば、彼は歴史と地理の重層的な翻訳を理解するために、空間物語の重要性を強調しているのです。彼はわたしに、西洋理論を単に移植するのではない、沈思に値する真の問題はわたしたちが自分自身の空間物語をいかに分節化するかということなのだ、ということを思い出させています。

わたしは彼に直接、この感謝を伝える機会を永遠に失い、とても残念に思っています。彼の知識と精神は、わたしたちがわたしたちの語ることができる物語と、わたしたちの起こすことのできる変化に集中するように導き、彼の死後も、多くの人たちを鼓舞し、刺激し続けると、わたしは強く信じています。

IP Iam-Chong:

正直なところ、私はいつどこでウィンシンと出会ったのか覚えていません。私が学部生の頃、彼の著作を読んだのはずいぶん前のことです。香港はもちろん、東アジアで最も重要な地理学者の一人であることは間違いありません。香港や台北での学会、友人との集まり、抗議集会など、さまざまな場面でよく彼に出会いました。バプティスト大学で正式に彼の講義を受けたことはありませんが、私は彼を師と仰ぎ、彼から多くを学びました。彼の思慮深いスピーチにはいつも感銘を受けました。また、私の学問的キャリアをととても気にかけてくださり、応援してくださいました。例えば、私が驚いたのは、彼が私の学科の課程に関する外部審査員を務めたとき、私の先輩に、彼らが私をもっと早く昇進させてくれなかったと苦言を呈したことです！

私のバックグラウンドは地理学ではありません。東アジアの批判的地理学やオルタナティブ地理学に関する私のわずかな知識は、ほとんどウィンシンから得たものです。彼は地理学がどのようにあ

るべきか、そして世界をより良くするための可能性を示してくれました。彼は、特に香港の若い活動家や学者たちに多くのインスピレーションを与え、彼らは彼の教えやサポートから多くの恩恵を受けました。EARCAG運営委員会を含め、私たち全員がウィンシンの精神を受け継いでいくと信じています。私は彼がいなくなることを寂しく思います。彼の地域社会と学界への貢献は常に忘れられません。

Jim GLASSMAN:

ウィンシンは一流の批判的研究者であると同時に、他に類を見ないほど温かく寛大な人でした。ウィンシンとの思い出はたくさんあるのですが、彼との二種類の経験が彼がどのような人物だったかを示していると思われます。

一つ目の経験は、EARCAGの会議中の温厚で建設的な存在で、たとえ深刻な意見対立のさ中でも、批判的な議論を委縮させることなく維持する、融和的な和音を彼はつねに奏でることができるように思えました。

二つ目の経験は、昨年、わたしたち二人がEARCAGがサポートする最初のオープン（オンライン）コースの指導に関わったときの、彼との短い、しかし温かい交流です。ウィンシンとわたしはこの期間、（白髪まじりの）頭を掻きながら、国境をまたいだインターネット教育の空間をナビゲートする方法を探り、いくつかのアイデアを共有しました。わたしはいつも、彼が自分よりも巧みにこの問題に対処していると思っていたので、この種のプロジェクトにおける彼の洞察からものはや恩恵を受けることができないことは非常に残念です。

EARCAGがわたしたちの将来の活動をとおして、彼の思い出と教育サービスの寛大な精神を維持することを願ってやみません。

HSU Szu-Yun:

ウィンシンとの思い出は、わたしが博士課程の大学院生だったころと、EARCAGのイベント中に彼からかけられた励ましの会話に遡ります。ウィンシンはいつもわたしの研究と生活について温かい配慮にみちた会話を始め、わたしはすぐに彼が人間として、そして批判的研究者として本物なのだと気づいたものでした。2022年のEARCAGが台北市で開催された後の、典型的な雨の冬の日、わたしたちは国立師範大学の裏通りでくださった昼食をとりながら、わたしの西洋の機関での教育の経験がEARCAGのわたしの見方にどう影響を及ぼしたのか話しました。これがウィンシンとわたしの最

後の会話となるのですが、そのときの彼の励ましの言葉はつねに力強く、これからそうであり続けるでしょう。個人として、そして批判的な学術コミュニティとして、彼がわたしたちみんなに与えた影響は、彼がわたしたちのもとを去ることがないことを示しています。

Geerhardt KORNATOWSKI:

2020の3月、ウィンシンと一緒にワークショップを開催する幸運に恵まれました。わたしたちは、2019年から20年にかけて香港で展開した出来事を受けて、西洋の外にありながら、それとのつながりもある重要な抵抗運動の新しいロカリティに焦点を当てる必要があると感じたため、社会運動に関する研究者を招きました。パンデミックのため、福岡では開催できず、オンラインで最終的に開催しました。

ウィンシンにとって、ワークショップ(会議やセミナーでもあります)は、厳密でありながらも友好的な学術的議論をとおして、しかし(おそらくもっと重要なことに)美味しい料理と配慮ある会話をとしても楽しむ、重要な社交の機会でした。ウィンシンは自分のネットワークにいるみんなを知っていました。彼は誰でも一緒に腰を下ろし、他愛もない話を始めることさえありました。彼にとって料理とはそうした雰囲気を作るための重要な手段だったのだと思います。しばしば、彼はワークショップのためにどの料理を選ぶべきか、わたしたちに尋ねてきました。彼が九龍城(「リットル・タイランド」)のタイ料理が好きになったのは、わたしがいつもそれを勧めていたからだだと思います。彼は尖沙咀の北京料理が本当に好きでした(毎回、同じコースの内容だったのです!)。太子の四川火鍋にみんなを連れて行くことも多かったです(みんなに刺激を与えたいだけでも!)

ワークショップの後に残った人たちを連れての、早めの点心ランチを覚えている人も多いでしょう。そこは香港バプティスト大学から歩いてそれほど遠くない、楽富に素晴らしい店があったし、今もあります。彼は最高のものを注文しましたが、いつも注文し過ぎでした。ウィンシンと最後に合ったのは、2023年末の上環の伝統的な点心レストランでたった二人の昼食をとったときでした(彼はすでに香港島に引っ越していました)。彼の同意なしで支払いを終えることは不可能でした。

ウィンシンは福岡を二度訪れてくれました。一度は休暇、もう一度はわたしの招待でした。わたしは彼にとってもローカルな場所を案内し、たくさんの世間話をしながら美味しい焼肉などを楽しみました。彼は本当に日本好きで、いつもその都市空

間に戸惑っていました。

MORI Masato:

わたしは自身の初めての国際会議出席である2006年の台北でのEARCAG会議でウィンシンを知るようになりました。わたしは香港からの参加者がよく似た批判的視点を共有していることに感銘を受け、ウィンシンが香港でのその視点におけるキーパーソンであると理解しました。その後のEARCAGの会議でウィンシンに会うことはとても幸せでした。彼は激しい議論の後でもつねに笑みをたたえていました。一連の会議やワークショップでは彼はいつもみんなに対して親切でした。宴会で、一人でいる人を自分のテーブルに招く彼をしばしばわたしは目撃しました。

2022年の台湾での第10回EARCAG会議での発表をキャンセルせざるをえなかったため、最後に彼に会ったのは2018年の大邱での第9回EARCAGです。今、2022年の会議に出席できなかったことを大きく悔いています。

わたしは彼の学問的サポートに感謝しています。わたしは新しい運営委員として彼とEARCAGにおいてEARCAGのために新しいことをやっていきたいと願っていました。わたしは彼のたくさんの思い出を心にとどめます。

ウィンシン、ありがとうございました。

SHIN HaeRan:

ウィンシンの情熱あふれる参与なきEARCAGを考えることはとても難しい。わたしは彼が自分の学生と協働した研究を取り上げた複数のセッションの司会をしていたことをはっきりと思い出します。わたしの研究に対しては、一度、わたしが西洋の研究者の研究だけを自分の理論的枠組みに頼っていると、異議を唱えたことがありました。正直に言えば、当時のわたしは代替案などなく、今もないのですが、彼の指摘は学問の構造について考えさせるものでした。彼は偉大な友人であり同僚でした。彼の批判的な研究と温かい心を忘れることはありません。

SHIN Hyun Bang:

批判的アジア研究と都市研究にとって大きな喪失です。わたしは彼が企画したウィンシンらしい——思考を挑発しユーモアに富み、エキサイティングな街歩きや美味なる料理を囲んで新旧の友人との交流に満ちていた——ワークショップに参加できたことは幸運でした。わたしはワークショップに参加できたことをうれしく思い、そこから多くを学んだ

ことを覚えています。彼の歓迎の態度は、当時のわたしをくつろいだ気分にし、彼の学生たちと飲茶の昼食に誘われたことでその気持ちはさらに強まったものでした。ウィンシンは批判的都市研究の多くの同僚と友人から心より惜しまれることでしょう。アジアの批判都市研究者は取り換えの利かない灯台の一つを失ってしまいました。

SONN Jung Won:

ウィンシンが2022年の台北でのEARCAG会議で招待発表を行ったとき、彼は2006年にロンドンでのUKプランニング会議の後のポートトリップや、その後のEARCAG会議で彼に初めて会ったときと同じように、エネルギーに満ちていました。わたしにとって本当にショックです。彼の逝去はわたしたち全員にとって大きな喪失です。わたしたちはついに東アジアの都市研究（西洋理論をアジアの諸都市に応用するのとは正反対のものとしての）であるものを行える批判的集団を持つようになり、彼の経験は来るべき数年において非常に貴重なものであり続けたはずで、彼の洞察に満ちた研究と同時に優しいマナーが、今後見られなくなるのは寂しい限りです。

WONG Kit Ping (Tammy):

1998年、私が学部1年生だった頃、ウィンシンはHKBUの地理学部新しい教授として着任しました。彼は学部で唯一、批判地理学の概念を教えてくれる教授で、1年生にとっては難解な科目でしたが、その後の私の学問的進路にとって重要な基礎を築いてくれました。彼は、歴史地理学を通して都市を分析する異なる方法を教えてくれ、私の学部卒業論文の指導教員になってくれました。翌年、彼は私を修士課程(MPhil)の学生として招き、私をより広い知識の世界へと導いてくれました。2001年には、ロサンゼルスで開催されたAAG会議に出席し、初めて国際的な研究発表を経験しました。2002年には、ウィンシンが主催した第2回EARCAG会議に参加し、世界中の学術界から集まった多くの同志に出会いました。

同じ年、ウィンシンともう一人の学生、そして私は、空間、権力、社会的(不)公正といった批判的理論を探究する研究グループを結成しました。私たちは、香港の都市現象を説明するために必要な知識や批判的視点が不足していることに強い危機感を感じていました。第一に、地理学を学ぶ学生は、都市計画や教育といった機関の一員となるために、主に実証主義的で定量的なアプローチを学んできました。第二に、多くの学生は長い文章を読むのが嫌いで、難しい概念や理論を理解するのに苦労しています。

私たちの研究会は学部内でも前例のないものでしたが、ゼロから始める決意をしました。ウィンシンの助手として、私はウィンシンとともに研究会を共同運営し、討論をリードし、彼の学生たちとつながり、コミュニティ訪問を企画しました。研究会では、*Urbanisation of injustices*、David Harveyの*Unequal Geographical Development*とその空間分析、John Allenの*Lost Geographies of Power*、Doreen Masseyの*For Space*と*The Power Geometry of Time-Space*、Henri Lefebvreの*The Production of Space*、Michel Foucaultの*Governmentality*などの批判的理論を掘り下げていきました。私はこれらの文献を読むのは初めてで、学生を指導する自信もありませんでした。しかし、このような集中的な読書は、大学が夜中に閉まるまで毎日勉強するという、若い頃の私の日常生活を導いてくれました。そのおかげで、私はこれらの都市批判理論に深く浸ることができ、学業や私生活に大きな影響を与え、私の視点を根本的に変えることができたのです。

2000年代初頭には、批判地理学は公共の言説においていかなる役割も果たしていませんでした。しかし、1997年以降、都市開発の過程でさまざまな都市危機や社会紛争、この時期、ウィンシンはさまざまな研究プロジェクトを立ち上げ、他の研究者と共同研究をしていました。彼は、都市研究の批判的な視点を通じて、学術的・公的な議論に積極的に介入するようになり、都市化の過程や権力関係、社会的(不)公正の諸問題を再考するようになりました。このような視点は、1980年代からの都市と土地の問題に対する彼の関心の継続であり、1997年以降の香港の新たな状況と結びつき、特に2000年代後半には、様々な闘いからの様々な経験と考察が続きました。

私たちは荃灣の古い労働者階級居住区を訪れ、都市再開発のプロセスと、社会経済再編の中での労働者の住宅運動の歴史について学びました。私たちは、香港の地政学的背景と労働者階級家族の周辺化の中で、天水圍ニュータウンの開発の軌跡を研究しました。2004年、私たちは湾仔の利東街の再開発に反対する闘争に参加し、その後「藍屋」の保存に参戦しました。ウィンシンは湾仔でコミュニティ・プロジェクトを立ち上げ、さまざまな人々を集めて将来の湾仔の空間計画のビジョンについて議論しました。彼は批判理論を推し進め、他の研究者、区議会議員、NGO、社会活動家、地域住民と緊密な関係を築きました。2007年まで、私たちはスターフェリーとクイーンズ・ピアで、土地開発に反対し、公共空間のために闘いました。ウィンシンは、取り壊しに反対するハンストと並行して、他の学者たちに混じって「人民フォーラム」でスピーチを行いました。

この数年間、私たちの生活は、批判理論の追求とさまざまな論争の場での闘争の間で交差していました。それが私たちの「片足は大学に、もう片足は地域社会に」という言葉でした。夜遅くまで、私たちはエディンバラ・ブレイスでスターフェリーとクイーンズ・ピアを守ろうとしていました。地理学以外の研究者や活動家、ソーシャルワーカーや住民とコミュニケーションをとるために、私たちは自分たちの言語を修正しなければなりません。また、何が批判的な視点なのかについて自分たちの意見を反映させ、香港のための独自の理論を構築しなければなりません。香港の都市開発を理解するための「小さな土地、多くの人々」という公式のストーリーや、「土地の需要と供給」といういわゆる経済学的な見方、草の根の生活を単なる貧困の問題として単純化した見方に対する批判において、ウィンシンは決して妥協することなく、自分の主張を我慢することなく、学界の盲点を大胆に指摘しました。

これこそ、私がウィンシンとともに経験した忘れられない知的生活です。理論と実践を追求する中で、それぞれの社会運動は常に私たちの知識の限界に挑戦し、同時に私たちの考えを切り開いてくれました。2011年、私は博士課程に入り、香港から中国へと研究を広げました。ウィンシンは1980年代から中国の都市研究の研究者であり、私の研究に助言を与えてくれました。そのため、私たちの会話は中国の都市問題や中国と香港の関係にまで及びました。私たちは深圳、東莞、広州に行き、都市や都市化された村でフィールドワークを行いました。この25年間の私の学問の旅は、ウィンシンの助言、励まし、支援によって満たされたものでした。批判的知識とは何か、公共知識人の模範とは何かを教えてくれたからです。

Maurice YIP:

運営委員会のメンバーの多くはEARCAGをとおしてウィンシンに出会いましたが、わたしの場合はEARCAGに、そして学問的にも個人的にもより広い世界に出会ったのはウィンシンをとおしてでした。わたしはウィンシンの指導のもと、学部と修士課程を修了し、その間、2016年の香港での会議運営において彼を手伝っただけでなく、2018年の大邱での会議には一緒に参加することになりました。わたしたちはほとんど毎日、交流し、この頻繁な交流はわたしが香港を去った後も続きました。確かではないのですが、おそらくわたしは彼の多くの時間を奪い、浪費することになったのだと思うのですが、それでもわたしの個人的な成長は、幅広いトピックに関するわたしたちの議論、非常に厳密な学術的、知的な討論から、何気ないテレ

ビドラマ、映画、ポピュラー音楽（ただし彼は常に後者を哲学的思考と関連付けることができ、わたしは今もなお少しでも理解しようとしているところ）から計り知れない恩恵を受けました。彼はわたしが世界を理解する方法を根本的に変えてくれました。わたしにしてくれたすべてのことに感謝します。

ウィンシンは彼の家族との時間に加えて、彼の学生やコミュニティと（多くの）時間を過ごしました。学生とコミュニティのメンバーとの読書会を行ったり、ローカル社会の文脈において学術的テキストを読んだり議論したりするために、都市のさまざまなところにわたしたちを連れて行くのに貴重な週末を費やす教授なんて多くいないと賭けてもいい。ウィンシンは本当に人びと、社会、世界を気にかけていました。彼の批判的見方と空間的正義の声の基礎を形成したのは、配慮する人間としての立派な態度なのだと思います。今日の競争的な学問システムにあってさえ、ウィンシンは主流の流行に追従することも、早く多くの論文を発表するために仕事の水準や質を犠牲することもありませんでした。むしろ、彼は学生と同僚に、議論し思考すること、知的成長のために時間をかけること、より良き社会変革のために介入するよう促しました。ウィンシンは人びとを大切に、彼らと関わり合うことを好み、そのことが学術的な議論や友人を作るのに適した場を提供する会議やワークショップをあれほど楽しんだ理由なのでしょう。

ウィンシンの卓越性への探求と支配的な研究に挑戦し、独自の理論を発展させることへのコミットメントをわたしたちは知っていました。彼は自らを都市地理学者に制限せず、批判地理学者と位置づけ、その地理学的研究は人文地理学と呼ばれる分野の発展のためだけでなく、世界の変革に貢献するために行われていました。彼はEARCAGをそうした目的を可能にする空間として、ローカルと地域の文脈に学問的に根ざしながら、グローバルな社会と相互作用できる場として見なしていました。彼の精神はわたしたちとともにあり、わたしたちが学問的打開を追求し、オルタナティブな未来のために格闘するよう動機づけることでしょう。

わたしたちはウィンシンの不在を寂しく思い続けるだろう。わたしたちは会議やワークショップの休憩時間に、ウィンシンと一緒にモカを飲みながら思考を挑発するような会話を楽しんだことを覚えている。彼のあたたかさや気前のよさは、思考に刺激を与える美味なる料理を提供し、わたしたちのグラスを飲み物と笑いでいっぱいにしてくれ、単なるもてなしを超えてわたしたちの心を満たしてくれた。

ウィンシンの批判的洞察力は、オルタナティブな未来のための団結した闘いに寄与し、都市、地域、世界に対する配慮と愛情に対する証を示している。

ウィンシンの生涯と研究についてのさらなる情報は、EARCAGのウェブサイトから、遺族による追悼文(<https://bit.ly/in-memory-of-prof-tang-wing-shing>)、香港バプティスト大学地理学科 (<https://geog.hkbu.edu.hk/upload/files/1/file/65bb3b06701ff.pdf>)および香港批判地理学グループ (<https://hkcg.wordpress.com/memorial>)の追悼文をご覧ください。

わたしたちは今後のEARCAGの会議でウィンシンの生涯と貢献をたたえることを楽しみにしている。

編集注

本稿の英語原文は、EARCAGのホームページ (<https://sites.google.com/view/earcag>)にも掲載されている。



香港で開催された第8回EARCAG会議開会式
2016年12月6日
(第8回EARCAG会議実行委員会提供)

In Remembrance of Professor TANG Wing-Shing: 25 Years of Friendship and Collaboration

International Steering Committee of East Asian Regional Conference in Alternative Geography

It is with great sadness that the International Steering Committee of the East Asian Regional Conference in Alternative Geography (EARCAG) reports the passing of our dear friend and colleague Professor TANG Wing-Shing on 26 January 2024. For nearly 25 years, Wing-Shing had played an important role in EARCAG, whose growth and expansion benefited from his intellectual insights and organisational efforts. We extend our heartfelt condolences to Wing-Shing's family.

Based in Hong Kong, Wing-Shing was a critical geographer and urban scholar, whose research focused on interrogating the mainstream urban thinkers with socio-historical processes and patterns of urban development, most notably in mainland China and Hong Kong, and formulating new ontology, epistemology, and methodology for this cause, especially his Tongbian-informed spatial methodology and the spatial story approach.

Wing-Shing's contributions to EARCAG

In 1999, Wing-Shing attended the inaugural meeting of EARCAG in South Korea, which he described as 'a big success' and 'one of the best [conferences] I [have] ever attended'. It was decided at the end of the inaugural meeting that the next meeting was going to take place in Hong Kong, and ever since then he had become an active member of the International Steering Committee. In 2001, he led the organisation of the 2nd EARCAG

meeting at Hong Kong Baptist University, where he had been teaching until retiring from his position of Full Professor of Geography in 2018. He co-edited, with MIZUOKA Fujio, a book entitled *East Asia: A Critical Geography Perspective* to publish some selected papers from this meeting. In 2016, Wing-Shing chaired the local organising committee to hold the 8th EARCAG meeting in Hong Kong again.

Over the years, Wing-Shing attended all the ten EARCAG meetings in South Korea, Hong Kong, Japan, Taiwan, and Malaysia. Wing-Shing organised or chaired conference sessions themed on, for example, 'Post-gentrification' (the 10th EARCAG in Taipei, 2022), 'Social Justice and the City in East Asia' (the 7th EARCAG in Osaka and Tohoku, 2014), the Urban Research Plaza Special Session on 'Alternative Urban Redevelopment' (the 6th EARCAG in Selangor, 2012), and 'Urban Redevelopment in East Asia' (the 5th EARCAG in Seoul, 2008). In total, he presented 15 papers at these meetings, shedding light on different geographical issues in mainland China and Hong Kong and aiming at achieving theoretical breakthroughs. He also attended the EARCAG Geopolitical Economies (EARCAG-GPE) workshops twice, in Canada and Taiwan, and presented 2 papers there.

Table 1 provides a list of the papers presented by Wing-Shing.

Table 1: The list of papers presented by Prof TANG Wing-Shing at EARCAG

2022 10th EARCAG Taipei	Towards a Land Situated Spatial Story as Informed by the Tongbian Philosophy (co-authored with Solly Benjamin)
2018 9th EARCAG Daegu	Gentrification is Dead: 'Nano'-isation in Hong Kong (co-authored with Maurice Yip)
2017 3rd GPE Workshop Taipei	The Umbrella Movement in Hong Kong: A Spatial Story Approach
2016 8th EARCAG Hong Kong	'Hegemony' of Property, Social and Political Struggles and Spatial Justice in Hong Kong: The Cases of Court Injunction in Admiralty during the Umbrella Movement and in Land Grabbing in Ma Shi Po, New Territories (co-authored with Yiu-Ming To)

2015 2nd GPE Workshop Vancouver	Occupying Movements in Hong Kong: A Spatial Story Approach
2014 7th EARCAG Osaka/Tohoku	High-density Development in Hong Kong and its Spatiality of (In)justice (co-authored with Joanna Wai-Ying Lee and Alan Smart)
2012 6th EARCAG Selangor	Where is Spatial Justice in Urban (Re)development of Hong Kong – with Special Reference to the Sham Shui Po District?
2008 5th EARCAG Seoul	Public Engagement as a Tool of Hegemony: The Case of Designing New Central Harbour Front in Hong Kong (co-authored with Joanna Wai-Ying Lee, Mee-Kam Ng, and Darwin Leung)
2006 4th EARCAG Taipei	Space, Power and Street Sleepers in Hong Kong (co-authored with Ka-Hei Chan)
	Working Class Geographies and Urban Redevelopment in an Industrial Township in Hong Kong (co-authored with Wong Kit Ping (Tammy), Ka-Hei Chan, and Kim-Ching Chan)
	‘The Freedom of Shopping’ – The Commodification of Public Street in Hong Kong (co-authored with Pui-Yee Man)
2003 3rd EARCAG Osaka/Tokyo	Examine the New Rationality of Governmentality of the H.K. Government to Discipline Pig Farmers by Using the Yuen Long District as a Case Study (co-authored with Kin-Wing Chan)
	Global Restructuring, Urban Redevelopment and Population Displacement in Tsuen Wan, Hong Kong
2001 2nd EARCAG Hong Kong	Housing Movements for the Poor in Hong Kong: Fighting for the Public Rent Review
	Illegal Construction in Shenzhen: The Extension of Urban Governmentality over Time and Space
1999 1st EARCAG Kyungju/Daegu	Development of Tsuen Wan New Town in Hong Kong: Power, Rationality and Space (co-authored with Wong Kit Ping (Tammy))
	Governmentality, Time-space Colonisation and China’s Socialist Geography

In addition to his contributions to the debates and discussions taking place at those conferences and workshops, Wing-Shing was also willing to experiment with innovative initiatives for the growth of the EARCAG community, such as in 2023 he participated in the EARCAG open course initiative and delivered the online lectures on *The Production of Space: A Critical Geography Perspective on China*.

Continuous friendships with Wing-Shing

Many colleagues and friends have met Wing-Shing for many years through EARCAG. The recollections by five senior members (namely CHOI Byung-doo, MIZUOKA Fujio, MIZUUCHI Toshio, HSU Jinn-Yuh, and PARK Bae-Gyoon) are printed separately in this journal issue. In this section, the following steering committee members (refer the member list below) recollect their friendships and precious moments with Wing-Shing.

International Steering Committee Membership

CHOI Byung-doo (Daegu University)

CHU Ling-I (National Changhua University of Education)
GLASSMAN Jim (University of British Columbia)
HSU Jinn-yuh (National Taiwan University)
HSU Szu-Yun (McMaster University)
IP Iam-Chong (National Yang Ming Chiao Tung University)
KORNATOWSKI Geerhardt (Kyushu University)
MIZUOKA Fujio (Hitotsubashi University)
MIZUUCHI Toshio (Osaka Metropolitan University)
MORI Masato (Mie University)
PARK Bae-gyoon (Seoul National University)
SHIN HaeRan (Seoul National University)
SHIN Hyun Bang (London School of Economics and Political Science)
SONN Jung Won (University College London)
† TANG Wing-Shing (Hong Kong Baptist University)
WONG Kit Ping (Tammy) (Osaka Metropolitan University)
YIP Maurice (University of Lausanne)

CHU Ling-I:

“I began my academic pursuits very late in midlife. Wing-Shing not only inspired me intellectually but also provided timely guidance when I felt lost. I am immensely grateful for his warm encouragement, which has freed me from doubts and uncertainties, guiding me

to focus on what I can do.

With the preparation of the EARCAG open course in 2023, I was fortunate to have the opportunity to interact more closely with Wing-Shing. He conducted four online lectures with the theme “The Production of Space: A Critical Geography Perspective on China.” I remember asking him a silly question that had been bothering me: why does Henri Lefebvre need to employ three aspects (or trilectic) when discussing the production of space? He provided a highly insightful interpretation using the concepts of “Yin/Yang” or “Tong Bian” from Chinese philosophy. At that time, this was quite a shock to me, and I struggled to understand why he insisted on using Chinese concepts to interpret Western theory. Through his four rigorous and solid lectures, I gradually understood that his emphasis on intellectual attempts neither to pit Western/Chinese theories against each other nor to forcibly merge the two. The key, he believes, lies in understanding the production of space through the intertwined processes of historical and geographical relations and translations. In other words, he stresses the importance of using the spatial story as a method to grasp the layered translations of our history and geography. He reminds us not to simply transplant Western theories, as the real question worth pondering is how we can articulate our own spatial stories.

I will never have the opportunity to express my gratitude to him in person, and I deeply regret it. I do believe his knowledge and spirit can continue to inspire and motivate many even after his passing, guiding us to focus on stories we can tell and changes we can make.”

IP Iam-Chong:

“To be honest, I do not remember when and where I first met Wing Shing. I read his works a long time ago when I was an undergraduate. He is definitely one of the most important geographers in East Asia, not to mention Hong Kong. I often came across him on different occasions, such as academic conferences, friends’ meeting places, rallies, assemblies, etc, in Hong Kong and Taipei. Although I never formally enrolled in his courses at the Baptist University, I regard him as my teacher and learned a lot from him. I was always impressed by his thoughtful speeches. He also cared so much about my academic career and showed his support to me. For example, to my surprise, when he served as external reviewer for the program of my department, he complained to my senior colleagues that they did not promote me more quickly!

My background is not geography. My little knowledge

about critical and alternative geography of East Asia mostly came from Wing Shing. He demonstrated to us how it should look like and its possibilities for making the world better. I am happy to know that he inspired a significant number of young activists and scholars, especially those in Hong Kong, who benefited a lot from his teaching and support. I believe all of us, including the EARCAG Steering Committee, will carry on Wing Shing’s spirit. I will miss him. His contribution to the community and the academic world will always be remembered.”

Jim GLASSMAN:

“Wing Shing was a uniquely warm and generous man, as well as a first-rate critical scholar. I have many fond memories of Wing Shing, but two kinds of experiences I had with him seem to me to illustrate the type of person he was.

One was my experience of his calm and constructive presence during EARCAG meetings, where he always seemed able--even in the midst of significant disagreement--to strike a conciliatory chord that maintained the critical discussion without allowing it to devolve.

The second experience was my brief but warm interactions with him last year when we were both involved in teaching the first ever EARCAG-supported Open (online) courses. Wing Shing and I shared some ideas during this time, both of us scratching our (greying) heads and trying to figure out how to navigate the spaces of transnational internet education. I’ve always suspected that he dealt with this more adroitly than I, and I’m so very sorry that I’ll no longer be able to benefit from his insights on this kind of project.

I hope very much that EARCAG will keep his memory and his generous spirit of educational service alive through our future activities.”

HSU Szu-Yun:

“My memory with Wing-Shing goes back to my time as a PhD student and all the encouraging conversations I had with him during the EARCAG events, where Wing-Shing always started with a warm and caring conversation about my study and life – and it did not take me too long to realize how genuine he was as a person and as a critical scholar. On a typical rainy winter day after the 2022 EARCAG in Taipei, we had a casual lunch in the back alley of the National Normal University, where we were chatting about my teaching experiences

at a Western institution, and how that had influenced my view of EARCAG. This turned out to be the last meeting I had with Wing-Shing, and his encouraging words back then were and will always be powerful. His impact on all of us as an individual and as a critical academic community shows that he will never truly leave us.”

Geerhardt KORNATOWSKI:

“In March 2020, I had the pleasure of organizing one workshop with Wing Shing. We invited scholars who work on social movements, as we felt it was necessary to focus on the emerging localities of significant protest movements outside, yet also in connection to, the West, following the events that had unfolded in Hong Kong between 2019 and 2020. Due to the pandemic, we could not organize it in Fukuoka, so we eventually did it online.

To Wing Shing, workshops (but also conferences and seminars) were precious moments of conviviality, to be enjoyed through rigorous, yet friendly academic discussions, but (perhaps even more importantly) also through good food and caring conversations. Wing Shing knew everyone in his network. He would sit down with everyone and even start talking about trivial things. I guess food for him was an important way to facilitate such an atmosphere. Often, he would inquire to us which cuisine we should choose for the workshop at hand. I’d like to think he grew fond of Thai food in Kowloon City because I would recommend it every time. He really liked the Beijing dishes in Tsim Sha Tsui (every time it would be the same course!). Most of the time he would take everyone to have Sichuan hotpot in Prince Edward (even if it was just to spice things up!).

Many would remember his early-time dim sum lunches, to which he took those who stayed behind after the workshops. There was/is an excellent place in Lok Fu, just not too far to walk from HKBU. He would order the best, yet always too much. The last time I met Wing Shing was in a dim sum restaurant in Sheung Wan at the end of 2023 (he had already moved to HK Island), where we had lunch with just the 2 of us. It was impossible to pay the bill without his consent.

Wing Shing visited Fukuoka twice, once for holiday purposes, and once on my invitation. I showed him some very local parts in the city, and we had some good yakiniku, along with lots of small talk. He really liked Japan and he was always puzzled by its urban spaces.”

MORI Masato:

“I came to know Wing Shing in the 4th EARCAG meeting in Taipei, 2006, which was the first attendance to international conference for me. I was impressed how presentations from Hong Kong shared similar critical perspective, and realised Wing Shing was a key person for the perspective in Hong Kong. I had been very happy to see Wing Shing in the following series of EARCAG meetings. He always kept smiling even after heated discussions. In a series of meeting and workshop, he had always been kind to all people: I have witnessed that he often invited people being alone to his table in teatime and banquet.

The last opportunity to see him and enjoy chat was in the 9th EARCAG, 2018, as I was compelled to cancel my presentation in the 10th meeting in 2022. It is now a huge regret not to attend it for me.

I really appreciate his academic supports. I, as a new steering committee member, really expected to do some new things in and for EARCAG with him. I shall keep numerous memories of him in my mind.

Thank you, Wing Shing.”

SHIN HaeRan:

“It is hard to think of EARCAG without Wing Shing's passionate participation. I vividly remember how he presented multiple sessions featuring studies that he collaborated on with his students. For my presentation, he once challenged me for relying solely on Western scholars' studies for my theoretical framework. Honestly, I didn't have an alternative at the time, and I still don't, but his point made me think about the structure of academia. He was a great friend and colleague. I will remember his critical studies and warm heart.”

SHIN Hyun Bang:

“It's a great loss for the critical Asian studies and urban scholarship. I was fortunate to attend the workshops he organised, which were characteristic of Wing Shing - both thought provoking and humorous, filled with exciting city walks and collegial engagement among old and new friends over delicious food. I remember how I was delighted to be part of the workshops and learnt a lot from them. His welcoming attitude made me feel at home at the time, a feeling further strengthened by his invitation to a dim sum lunch with his students. Wing Shing will be dearly missed by many colleagues and friends in the critical urban scholarship. Critical urban scholars from Asia have lost one of its beacons, which is

going to be irreparable.”

SONN Jung Won:

“When Wing Shing gave the plenary presentation in the 2022 Taipei EARCAG, he looked equally energetic as I met him for the first time in a boat trip after the UK planning conference in London in 2006 and in EARCAG conferences afterwards. It was really a shock to me. His passing is a big loss for all of us. We finally have the critical mass to do anything that is actually East Asian urban studies (as opposed to application of Western theories to East Asian cities) and his experiences would have been extremely valuable in coming years. I will miss his gentle manners as well as his insightful research for years to come.”

WONG Kit Ping (Tammy):

“In 1998, Wing-Shing joined the Geography Department at HKBU as a new professor, while I was a first-year undergraduate student. He was the only professor in the department to teach critical geographical concepts - an abstruse subject for first-year students, but laid an important foundation for my later academic pathway. He taught me a different way of analysing cities through historical geography, and became the supervisor of my final-year undergraduate thesis. The following year, he invited me to be his MPhil student, and brought me into a wider world of knowledge. In 2001, we attended the AAG conference in Los Angeles - my first experience presenting our work internationally. In 2002, I attended the 2nd EARCAG conference which was organised by Wing-Shing, and where I met many of his comrades from the greater academic community worldwide.

In the same year, Wing-Shing, another student and I formed a study group to explore critical theories such as space, power and social (in)justice. We felt a strong sense of urgent call due to the lack of knowledge and critical perspectives needed to explain the urban phenomena in Hong Kong. Firstly, geography students were mainly trained in the positivist and quantitative approaches, to become part of institutions like urban planning and education. Secondly, many students disliked reading long texts and struggle to understand difficult concepts and theories.

Our study group was unprecedented in the department, but we were determined to start from scratch. Working with Wing-Shing, I co-organised the study groups and led discussions, and, as his teaching assistant, connected with his students, and organised community visits. In the study group, we delved into critical theories such as

“Urbanisation of injustices”, David Harvey’s “Unequal Geographical Development” and his spatial analysis, John Allen’s “Lost Geographies of Power”, Doreen Massey’s “For Space” and “The Power Geometry of Time-Space”, Henri Lefebvre’s “The Production of Space”, Michel Foucault’s “Governmentality”, and others. I was new to these literatures, and lacked the confidence to guide students in reading them. However, such intensive reading guided my everyday life in my young ages: studying day-by-day until the university closed at midnight. This let me deeply immersed in all these critical urban theories, profoundly influenced my academic and personal life, and fundamentally changed my perspective.

In the early 2000s, critical geographies did not play any role in public discourse. However, the city began to experience various kinds of urban crises and social conflicts in the course of urban development after 1997. During this period, Wing-Shing began to conduct different research projects, and collaborated with other researchers. He began to actively intervene in academic and public discussions through the critical perspective of urban studies, rethinking processes of urbanisation and power relations, and various issues of social (in)justices. This perspective was a continuation of his concern on the urban and land issues since the 1980s, that combined with a new condition of post-1997 Hong Kong, followed by a range of experiences and reflections from various struggles, especially in the second half of the 2000s.

We went to the old working-class neighbourhoods in Tsuen Wan, learnt about the process of urban renewal and the history of workers’ movement for housing in the midst of socio-economic restructuring. We studied the development trajectory of Tin Shui Wai new town in a geo-political context of Hong Kong and the peripheralization of working-class families. In 2004, we joined the struggles against the redevelopment of Lee Tung Street in Wan Chai, and later the preservation of “Blue House”. Wing-Shing launched a community project in Wan Chai, which brought different people together to discuss the vision of spatial planning for Wanchai in future. He pushed forward critical theories, established a close relationship with other scholars, local councillors, NGOs, social activists and local residents. By 2007, we were all at the Star Ferry and Queen’s Pier and struggled against land development and claimed for our public space. Wing-Shing gave his speech at the “People’s Forum”, among other scholars, alongside the hunger strikes against the demolition.

Over these years, our lives were criss-crossed between the pursuit of critical theories and the struggles in

different controversial sites. This was what we said, “with one foot in the university and the other in the community”. Late at night, we were still at Edinburgh Place, trying to defend the Star Ferry and the Queen’s Pier. We had to revise our languages to communicate with non-geography scholars, activists, social workers and residents; and we also had to reflect our views on what constituted a critical perspective and built our own theory for Hong Kong. In his criticism of the official story of “tiny land, many people” to understand urban development of Hong Kong, the so-called economic view of “land supply and demand”, the simplistic view of grassroots’ lives as just a matter of poverty, Wing-Shing never compromised and held back his arguments, and boldly pointed out the blindspots of the academia.

This is the intellectual life I have experienced with Wing-Shing that I will never forget. In our pursuit of theory and practices, each social movement constantly challenged our limits in knowledge, and at the same time opened up our thoughts. In 2011, I started my PhD studies, extended my research from Hong Kong to China. As Wing-Shing has been a scholar in China’s urban studies since the 1980s, he advised my study. Our conversation was therefore extended to urban issues in China, as well as the relationship between China and Hong Kong. We went to Shenzhen, Dongguan and Guangzhou to conduct fieldwork in the cities and urbanised villages. The last 25 years of my academic journey is filled by Wing-Shing’s advice, encouragement and support. Wing-Shing played the most important role in my life for he taught me what critical knowledge is, and being the role-model of a public intellectual.”

Maurice YIP:

“Many of my fellow Steering Committee members met Wing-Shing through EARCAG, but in my case it was through Wing-Shing that I was introduced to EARCAG and to a much wider world, both academically and personally. I completed my undergraduate and MPhil degrees under Wing-Shing’s supervision, during which I had the opportunity not only to assist him in organising the 2016 meeting in Hong Kong, but also to attend the 2018 meeting in Daegu together. We interacted almost every day, and this frequent interaction continued even after I left Hong Kong. I wasn’t sure, but I probably took up and wasted too much of his time, yet my personal growth benefited immensely from our discussions on a wide range of topics, from very rigorous academic and intellectual debates to very casual TV dramas, films, and popular songs (although he could always relate the latter to his philosophical thinking – which I am still

trying hard to understand a bit). He has changed the fundamental way in which I make sense of the world. I am grateful for everything he had done for me.

Wing-Shing spent (a lot of) time with his students and the community, in addition to spending time with his family. I bet not many professors would spend their precious weekends holding reading groups with students and community members, taking us to different parts of the city just to read and discuss academic texts in the context of local society. Wing-Shing really cared about people, society, and the world. I think it is this admirable attitude of being a caring person that formed the basis of his critical perspectives and voices for spatial justice. Even in today’s competitive academic system, Wing-Shing did not follow the mainstream trend, nor did he sacrifice the standard and quality of his work in order to publish a large number of papers quickly. Rather, he encouraged his students and colleagues to debate and think, to take time for intellectual development, to intervene for better social change. Wing-Shing cared about people and liked to interact with them, which was probably the reason why he enjoyed conferences and workshops so much, as they provided the appropriate setting for academic debate and making friends.

We knew of Wing-Shing’s quest for excellence and his commitment to challenging the dominant literature and developing original theories. He didn’t restrict himself as an urban geographer, but he positioned himself as a critical geographer, not merely for the development of the field called human geography, indeed his geographical work was conducted for contributing transformative knowledge to the world. He saw EARCAG as a space that could make such goals possible, academically rooted in the local and regional contexts but being able to interact with the global society. His spirit will stay with us, motivating us to pursue academic breakthroughs and struggle for alternative futures.”

Wing-Shing will be missed. We remember the times when we would gather to share mocha and engage in thought-provoking conversations with Wing-Shing during the session breaks of the conferences and workshops. His warmth and generosity extended beyond mere hospitality to the realm of enriching our minds, offering us delicious food for thought and refilling our glasses with both drinks and laughter. Wing-Shing’s critical insights demonstrate a testament to his care and love for his city, the region, and the world, contributing to our collective struggles for the alternative futures.

For knowing more about Wing-Shing’s life and work,

we invite the EARCAG community to read the obituary notice from Wing-Shing's family (<https://bit.ly/in-memory-of-prof-tang-wing-shing>), and also the memorial pieces from the Department of Geography at Hong Kong Baptist University (<https://geog.hkbu.edu.hk/upload/files/1/file/65bb3b06701ff.pdf>) and the Hong Kong Critical Geography Group (<https://hkcg.wordpress.com/memorial>).

We look forward to appropriately honouring Wing-Shing's life and contributions at the future EARCAG meetings.

編集注

本稿の内容は、EARCAGのホームページ (<https://sites.google.com/view/earcag>) にも掲載されている。



The opening ceremony of the 8th EARCAG Conference held in Hong Kong
December 6, 2016
(Provided by the Organizing Committee of the 8th EARCAG Conference)